WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

Feb. 25
1888
No. 98

明治二十一年二月廿五日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送税

女學雜誌

第九十八號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

附錄　現今日本女況英文

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 98, February 25th, 1888.

EDITORIAL: — Family Life in Japan: No. III (Poisonous Effects of Unhappy Homes).
LEADING ARTICLES: — "Woman's Educational Society" by Miss N. Morooka; on Costume, by Prof. M. Ogata.
MISCELLANIES: — Thoughts on Japanese Poetry; Speeches Delivered at the Opening of "Royal Holloway College"; Women's Costume in Japan (History of "Kimono" and "Obi").
NOVELS: — "Last Days of Pompeii" (Arbeces of Egypt); Bouquet of Novels: No. 1. — Scott's Kenilworth.
BIOGRAPHIES: — Olympia Morata.
CORRESPONDENCES.
CHILDRDN'S COLUMN: — Two Natural Servants.
GENERAL NEWS.
SUPPLEMENT: — Condition of Woman in Japan (in English), by Miss K. Shimada

第九十八號

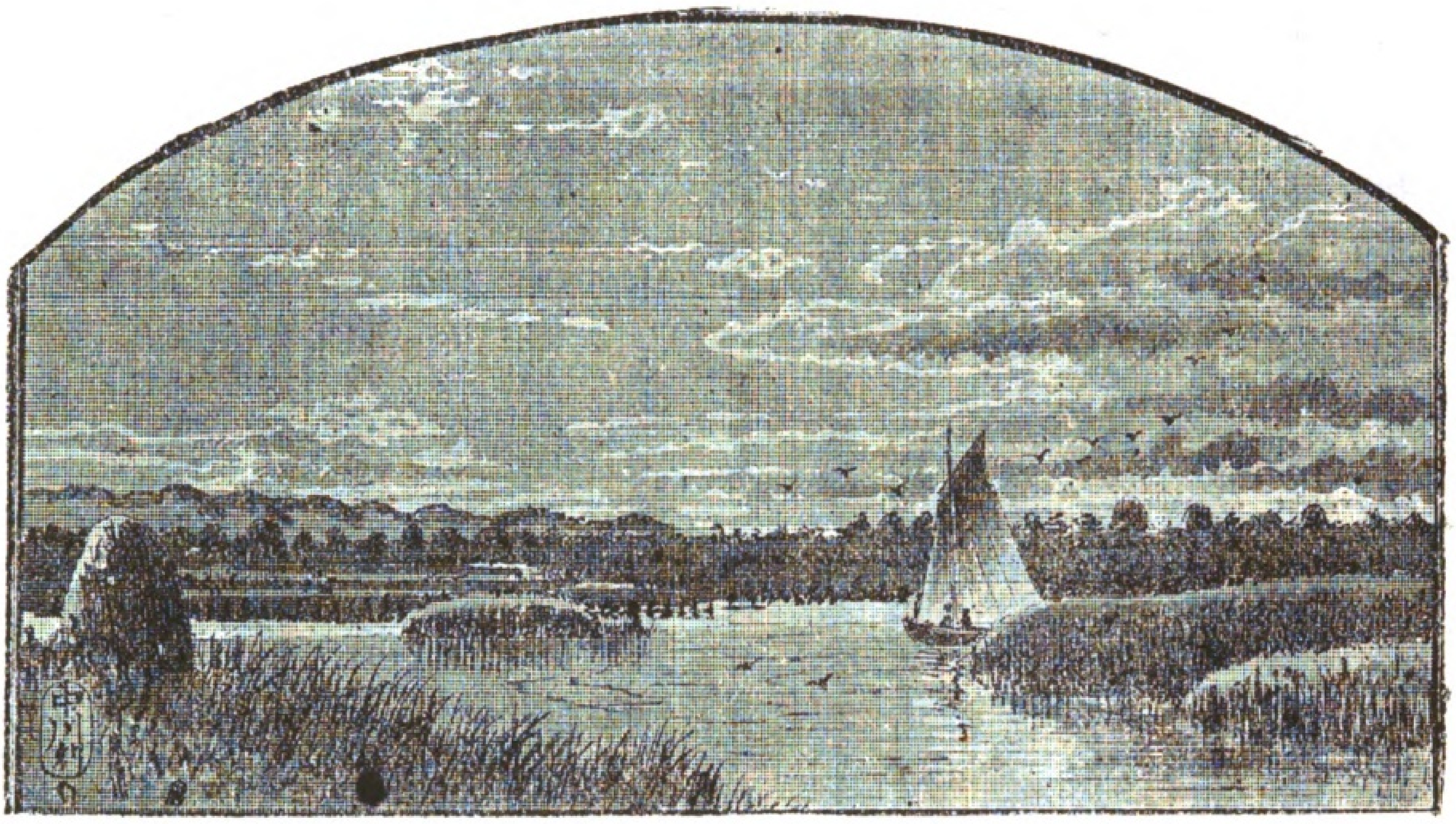
●社説　日本の家族（第三）和樂なき家族より起る害毒
●論説　婦人教育會（師岡のぶ述）○衣服の説（緒方正規述）
●叢話　和歌のはなし（佐々木健）○ホロエー女子大學に於ける演説○むかしばなし第二回
●小説　奔彪榮華の夢（埃及のアベセス）○小説神髓第一篇（スカツト氏ケチルチルス第三回）
●寄書　文苑歌文（鈴木弘恭大人撰）
●新報　二十二件
●附錄　小供のはなし第三回（忠義なる家來二人）

●珊瑚の珠（第五十四回）

○コウレイ曰く小兒の時に見做ひたる事物より受る感化及び其の心中に植えて根の付たる意思は總身に貫徹すべし之を喩ふるに猶ほ小さき樹に文字を彫り付くるが如し樹の長大となるに隨つて其字隨つて廣がるべし。

○ジヨセフ、メイストレ曰く婦人は絶大の著書を筆せず算法を創造せず望遠鏡を發明せず蒸氣機關を製出せず然れども此等よりも更に大にして更に善なるものを成就したり蓋し卓行美德ある男子婦人を其の膝下に於て薫陶冶鑄すると豈に器械創造より大ならずやこれ豈に世界に於て最上絶好なる產物にあらずや。

○フランセス、ターナー曰く然れども女流にも亦た女丈夫あり即ちピートル大帝の皇后は獨り能く大帝の氣儘を制しポージヨウのアンヂは佛國の爲に曼兵を追反しアークの如安は英軍の爲に佛兵を追退けプロシアの女王ルイサはナポーレヲンに反對する曼軍の大將となり又マダム、デ、スタールは同じくナポーレヲンの政敵と爲りて之をひやかしマダムローランドは自由政黨の首領と爲れり此外ケントの女王ベルタ又アウストリアのマルガレツトの如き皆此類也。



女學雜誌第九十八號
明治二十一年二月廿五日發兌

社説

○日本の家族

（第三）和樂なき家族より起る害毒

天日燃ゆる計りにて砂の雲いよ〳〵之を燥かし地質燒くる程にて礫の颪いよ〳〵之を枯らし滿目漠々として緑色なく生氣なく一の樹陰なく川流なく一草一木一鳥一獸なきは即はち世に謂ふ所の砂漠なるものなり旅客の此地方を旅行するは容易の事にあらず相い隊を組み食を荷ひ歩々灰塵を分けて進む日の一方に沒するとき晝終るとして即ち臥し日の一方に登るとき夜の去るとして則はち起く一日又一日跼蹐として行く偶ま狂颪あり砂巻き礫飛び灰土天地を覆ふ此時もし死せざれば僥倖ならんのみ。凡て砂漠旅行の艱難なるは畧ぼ如此しと雖ども然れども此の不愉快なる境界にも尚ほ僅小なる樂土なきにあらず只見る砂礫乾燥の間に一邊の緑天地あり、圖らざるに突然にも樹木蒼々亭々として伸び水泉混々滔々として流れ花笑み蟲吟し果實熟ち樹陰被はんとす旅客此に達すれば精神俄然として覺長日の辛苦拭ふが如くに消ゆべし。此の緑天地ハ即

はち砂漠中の樂園と稱し彼の地旅行者の日夜に怨望して止まざる所のものなり、思ふにホーム家族の人世に存する亦た當に如此くなるべき歟。

然るに吾人我日本國のホームを窺ふに其家族の實況殆んど全たく之に反對し一家ヿ和樂團欒の和氣甚だ乏しきは言ふも愚にして戸々皆な是れ不幸福の巣窟にあらざるもの尤も少きを認む抑も是れ何等の由縁なるぞ。旅客は砧の音に家天を望み遊子原頭の月に鄕關の母を懷ふ而して其の樂園たる家内に住するとき精神反つて困しみ辛苦寧ろ大に增すあるが如きハ大不可思議のことにはあらざるか、然れども致し方なし吾國現今の實際にハ日本に眞正の幸福ある家族殆んどあるなしと云ふも差支へなきにはあらずや。凡そ評判ハ物の珍らしきを八釜しく述立るものなり然に吾人ハ和樂なき家族の評判を聞くと甚はだ稀れにして丸ろく治りたる家族の評判を聞こと時として之れあり人若し姑舅と嫁との苦情夫婦親子間の喧嘩を聞ば左程之を珍しくもなしとして冷淡に持遇すべし但だ若し一家團欒して和氣悠々たるものあらんにハ一鄕之を賞立て一國之に感心し遂に彼の新聞紙に迄で麗々として之を書き立つるとあるに至る驚くべきの怪事にして必竟日本に平和なる家族の尤も少なきを證するものとす老子云く不善あるが故に仁義の名高しと日本に評判せらるゝ和樂せる家族の如き盖し是れあらんのみ。

然らば申すも殘念の極なれども我國にハ和樂せる家族甚だ少なしと云はざるを得ず曰く甚だ少なし然らば此の和樂せざる家族より起る害毒の尤も夥しく尤も莫大なるを知る也。凡そ和樂なき家族に於てハ、第一に當に得らるべき所の幸福を得るとあたはず是れ先づ何よりもの害毒たり、凡そ人間は樂を求むる所のものなり假令ひ少々の難儀少々の苦勞を爲すとも之は皆な後に於て樂を得るの下でしらへなりと覺悟すればこそ則ち能く此の難儀苦勞をも忍耐するものあり故に人間の其樂を求は其飮食睡眠を求ると均く一日一夜と雖も決して忘るゝとなし、されバ之を内に得ざれバ外に求め其淸きを得ざれば切て其不潔なるものをも求如何にもして望樂の心を滿足せざれば止ず、之を以て聖人ハ衆の樂を損せず億兆皆和樂して其思を滿足するを以て政の上乘と爲す之尤もの儀にして君子の務は人の樂を求るを制せず寧之を導きて其淸き樂を求しむるにありと信ず、然を日本戸々の家族は大率其當に樂を得べき所の一家内に於て充分の和樂を得ざるが故に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

止を得ず外に出で丶其樂を求むるに至れり、老父は茶飲友達を訪ふて終日碁を圍み老母は六阿彌陀に參詣して嫁のウハサを棄て妻ハ僅かに昔のお友達を尋ねて一日せい〳〵として氣を伸ばすを得るを喜ぶ凡そ族人皆な如此あれば亭主は尚ほ更らに其の家を面白とせず遂に內を外にして泊まり歩くに至るとあり一家亂離不都合の極ありと雖ども事の起りは其家內に樂を得ざるが故に則はち之を外に求るに因る人間の天性として眞に致方なきものと雖ども如此は國家の爲に尤とも慷歎すべきもの也。蓋し家內に於ての遊樂には健全清潔の分子を含めども屋外の遊樂には必ず多少遊惰放蕩の性質を存するものにて凡そ一家內にて遊そび戯る丶は毫も心配するに及ばず是れ即はち一家和樂の基にして國家の喜び之に過ぎたるハあしと雖も苟も其樂を外に於てする時は其遂に不潔の遊樂に陷らざるは殆んど稀也。人其樂を內に得ざれば之を外に求其清きを得ざれば止を得ず其濇らざる者をも求るとは此謂なり。故に一家に和樂あきときは其族人が當に得らるべき所ろの幸福を得て收めざるのみあらず人間本來の情慾として勢ひ外に其の樂を求むるに至りその決局は一家の不和、個々の遊情放蕩とあるべし。然るに其の害毒の及ぶ所は啻に一家の不和不幸のみにあらず先づ一族に損を來して一國の上に莫大ある不利を生ずるの元因たるとあり之れを尤とも憂ふべきものとす蓋し人の此の俗世界に立出て勞働するハ以つて戰爭に喩ふべし、家に在るの老父母は宜しく草鞋を編み妻は戰衣を繕ろひ弟妹は火藥銃丸の用意をなし潔よく當の主人を送つて其首途を祝すべし而して主人外に戰ふの間は其吉左右何如あらんと掛念し或は立て望み或は座して考へ一族額を集めて其思を一つにし只だ彼の戰ひ手の歸るを待べし時來つて彼人歸らんか妻ハ先づ飛び出て其草鞋を解き弟妹は奔走して愉快に洗水を汲み老父母は立て柱に倚り彼を下ゑも置ず戰の樣姿を尋ね其の軍功の多少を聞て或は喜び或は悲むが如なるべし。如此あれば主人の辛苦艱難は容易にして拭ひ消さる丶を得て而して其の喜びハ共に喜ぶものを得て彌よ嬉しく其の失望は一家族のはげましを得て乍ちに慰めらるべし、既に家に歸て如此き歡慰を蒙らば勞れたる筋骨一夜にして直ほり翌朝は勇氣昨日に十倍して別辭凛々更に矛を執て驅出るを得べきなり。然るに主人一日の勞苦を畢りて家に歸れば父母は何となく不快なる面色をして甚だ樂のしからざるが如く弟妹は意地惡氣に默して特更に物言はざるが如く妻は眼に淚を浮べて

訴ふる所あらんとす斯て相食するに談話緒を亂して快よく合はず彼此冷淡にしてよそ〳〵しく相ひ構ふ主人一日の成功を話すに左程に喜ぶものなく偶ま額を痛て失敗の苦痛を現するに族人殆んど之を無頓着に置けり斯くて夜中寢室に入れは茲に妻の訴あり翌朝快よく起出るに尙ほ愉快に之を送り遣るものなし、戰場の隱れ場沙漠中の樂園にして如此くならば當の主人の不愉快抑も何如ばかりぞや其不愉快は凝つて其力を痿し其戰は甚だ弱く其旅行は遙に短く一日の功勞亦た數ふるに足らぬものあらん、是れ一人の損耗一家の不利益にして即はち一國大不利の基ひたり斯ては爲し得べき事業も成らず出來得べき仕事も捗らずして一家貧乏に陷ゐり一國困窮に流れ經濟の上權力の上に於いて國家の損を蒙ると實に莫大ならんとす。故に之を和樂なき家族より起れる第二の害毒と爲す。

然るに其害毒は啻に之れのみにあらず彼の尤も愛すべき幼年の子供は如此き和樂せざる家族に於ては迚も立派なる生育をば爲し得ざるへし、子供は軟かき餅の如きものにて最初之を置く所ろの家族の事情に隨つて何如ようにも形造るゝもの也一家もし和樂して族人悉く愉快ゝ暮さば子供も亦之を見習て性質爽快活潑の人とならん族人相互ひに愛して彼此ともに親切を盡さバ子供も亦た之を見習つて性質博愛仁惠の人とならん然るに一家もし喧嘩の市場となり族人悉く敵同士の戰爭を爲さば日夜に之を見習ふ所の子供は果して何如に發達すべきか何人と雖ども此如き家族より品德完全なる紳士貴孃の出現を望む能はざるべし。特に吾人が平素日本國民の爲に痛歎する所のものは其の眞實の氣象に乏しくして行狀の甚だ浮薄に走り易きに在り西人曰く諸の英雄に存する一つの通性は其眞實あるにありと思ふに啻に英雄に限らず凡そ開化したる上等の國民には是非とも此の眞實の氣象あるものなかるべからず怒るときは宜しく怒るべし然れども其怒るや決してノルマントン事件に於けるが如くあるべからず慷慨するときは宜しく慷慨すべし然ども其慷慨は袖を腕にかゝげステッキを振回して元老院門前に涙を垂るゝ壯士の如きのみにては宜しからず但夫れ其怒るも慷慨するも泣も笑ふも悉く衷情の止を得ざるに出で而して衷情一度動いて既に之を身外に發するときは成さゝれば亦止ざるの氣象なかるべからず此等は皆な眞實の人よく之を爲して浮薄の人の爲し能はざる所なり、只だ恨らくは吾國民に尤も欠る所の一つの氣風は即ち此の眞實の一念にして之より百の厭ふべき所行の立現るゝを見ると眞に殘

念の極なり、何如にも爲し此の氣風を改めんとして扨て如此き氣風の由て起る所の由縁を考ふるときは即ち戸々の家族に眞實の氣風の行なはれざるを以て其元因中尤つとも大ひなるもの丶一つと爲さゝるべからず。族人腹に不平を抱いて口にお上手を言ひ當の相手の居らざるとき惡口罵詈至らざるなからんに正直なる子供は族人の所行裏表に陰陽あるを覺り外面を虚飾して内心を欺くの惡德たるを辨ぜず此の厭ふべき空氣に養はれて知らず識らず能く欺くの人となる也既でに一旦能く欺くの人となれば眞實の氣象は既に全く立去り日に浮薄の所行に甘んじて彌よ浮薄の人と爲るべし之より感情を製造して故爲に怒り故爲に泣き遂に故爲に慷慨悲憤歔欷流涕長大息するに至る而して如此く故爲に感情を弄するもの則はち眞實に怒り眞實に泣き眞實に慷歎するの氣象を失ひ悲ひ矣哉浮薄片々として紙の如き武士烈女とハ爲る也。故に吾人は我國民の氣風を歎じ此の氣風を改むるの必要を感じ其の大根底として先づ一家の和樂せざる可らざるを知る而して現今の實際に眞正のホーム少なしと云はゝ夫れ將た後代の日本人を何如せんや。之を和樂なき家族より起る害毒の第三と爲す。

若し一々に數え擧れば方今の日本の家族より起來る害毒甚ハだ多し然れども前三條の如きは其中の尤も大なるものにして且吾人の尤も注意すべきものなるが故に暫らく此を述べ去つて他を略せざる可らず。抑も一國は一家より起り、一國民は一家族より成り、未來の日本帝國民は即はち今の頑是なき子供等より生ずるものなり、然るに一家齊はず一族勵めづんば我日本國惣躰の安寧富貴固より望むべきにあらじ吾人大學に於て家齊つて而して後ち國齊ひ國齊つて而して後に天下平也と讀みたり今に於て實に其語に妙味あるを覺え痛歎に止む能ざるものあり而して舊日本を破りて新らしき日本帝國を造り數千年來の惡習慣を去つて新鮮清潔なる眞正の文明を組立るものは未來の幼兒にあらずや其幼兒にして今ま如此き不幸福なる家族に於て養成せらるゝを見る吾人は更に痛歎の念に堪ゆると能はず、然らば即はち日本の家族其れ之を此儘に放置すべきものにあらざる也。

論説

○婦人教育會

華族女學校教員　師岡のぶ　述

左は婦人教育會發會の砌師岡女史が演述ありたるを速記したるものなり其の大意は此頃すでに他の雜誌にも掲載せら

れたれど當日數多有益ある演説ありし中に就て辨者の品格の高潔ある其思想の熱心なるを以て尤も吾人を敬歎せしめたるは即はち同女史に在るべしと信ぜらるゝが故に即はち其の全文を左に掲ぐるに至ると云ふ　（女學雜誌編者、白）。

私は只今御披露のあッた通り此婦人教育會の會員てあります此會も此頃出來て私は這入たてて御座いますが今日圖らずも此貴い御席を汚さなければならん都合にありました夫故何か申上度と思ッても私は不作法であり其上學問もあく又總ての事に付て經驗も御座いませんから致方があくいッそ、何か資本の出來る迄見合せに仕樣と思いましたけれとも或御友達の勸に因り今日此御席に出ましたは誠に面目と思ますさて私は只今餘り手前勝手且嗚呼間敷い次第で御座りますが此會に這入た趣意を述べますから暫時御聞取を願います　私が此會に這入りし旨意を申上る前に順序あれば先つ女子教育の必要であると云ふ事を一言申します女子教育の必要であると云ふとは今日申上る迄てもなく二三の哲學者先生を除くの外は皆必要てあると云ふとに成て居て之を言變れは輿論と成てあります其れてすから必要か必要で無いかと云ふ問題は只今では事舊みとありしが然し女子教育に付て當時一躰に人が目を着けて居ります所は此世中の女子は何ふ云ふ風に教育したら宜らふ何ふ云ふ風にしつけをしたら宜らふと云ふ點であろうと私は考へます即ち婦人は外は柔和て優美に見へても内には勇氣のある樣にしなければなりませんが斯く外に優く内に勇氣のある樣にするには何ふ云ふ風に教育したら宜しふ御座りませうか夫れには歐米の教育を其儘摸して來たら宜しからふと云説もありますし或は又一國と云ふものは其國の固有の風俗があるから何も彼も一から十迄殘らず持て來には及はぬ日本にも良い風があるから其風は殘して置いて其上に西洋の良き風を採たが宜かろうと申す樣な折衷説もあります何れにせよ當節では女子教育の必要であると云ふ第一の問題は濟で第二の問題の如何云ふ風に女子を教育したら宜からふと云ふとに轉て居るだろうと存じます、さすれば只今とゝて女子教育の必要不必要と云とは申上るには及ひません樣なもので御座ますけれども猶一言畧論して申ますれは總て世中の人は夫妻相揃て始て完全の人とあり始て社會に立て完全の義務を盡とが出來るものにて或先生より承りますに西洋では夫が其妻を指て私の半身と申し又妻は夫を指て同じく私の半身と申すさうで御座ります斯必す夫 妻 相 揃て世中に事を爲と致せば男女

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の關係は極く親密のものでなければなりますまい而て其夫たる人は如何に立派で學問あり經驗あり財産もあり世中に立て何に一ッ不足のない人でも若其奥樣が無教育者で有て役に立たずバ何と不都合では御座ませんか實に半身不隨の人と云ても宜しかろう何故なれば半分役に立て半分は役に立たぬ人でありますからで、そうして見れば女子の教育は誠に大切なものであります其から次は一躰人を教育するには何時が一番肝要であるかと云へは幼少い時で御座いませう其幼穉の教育を致しますのは誰が爲るかと云ふに必ず其母親がするのでありませう其母親は申迄もない女子であるが若も一番肝心の教育を掌つて居る處の母親が無教育で子供をしつけるとを知なかつたならば如何でありませう誠に不都合なものでは御座ませんか是が其必要なる第二で御座います。

又衣食住と云ふものは一日も欠くとの出來ないもので此世中に人の生存して居るのは衣食住に因て生きて居り其衣食住を扱ふ者は誰であるかと云ふに十に七八は女子で御座います其女子たる者に教育がなければ從て衛生のとも知りませんから無茶苦茶の事ばかり致すて御座りませうさすれば人々の身躰に何位の害を及し又社會に向ても大なる害を及しますか知れません是が女子教育の必要なる第三であります其外不都合の事は大層御座います毎日の暮し即ち家計上に於ても女子に教育が無かりしならば不都合であり又交際上に於ても大層不都合を來すて御座いませう其から又婦人に德育を施なければ大層其國の風俗にも關し其極端に至りましては國外にまで恥を暴す樣なる愍むべきとを仕出す樣になります其外女子に教育がなければ困ると云とは澤山ありますけれども其を一々申しますれば暇が費へますから別段申しません其で一歩を進て教育會は一躰如何なるものであるかと申ますに其事は諸君さんもよく御存じてあるが順序でありますから申しますが教育會は如何云ふ會であるかと云ふに一言に約めて申しますれば此會は教育を普及する爲の會で御座いませう處が我東京には立派な大日本教育會の設けが有て立派な先生方が集て一般の教育に付て御世話があるから何も別段に婦人教育會を設くるに及はんと云ふ人があるかも知れませんが私の考では然ふ云とはないと思います男女は性を異にしてをりますから教育に置きましても又緩急の度を異にしてをるだろうと思います婦人なれば先づ家政を管り子供を育てるが第一肝要でありませうが男子なれば左樣なとは第二にて宜と云ふ樣に教育に緩急

の別がある故其進行の向も違なければならん且男子の教育は昔から段々諸君か御骨折を積て余程基礎臺土か高く成ております、處が女子教育ハ人々が目を着る樣になりしハ七八年以來で御座ります夫れ故に教育の度が大層違ております比喩を學校の生徒に取て見れハ一方ハ既に高等小學校を卒業して是から尋常中學にでも這入ろと云ふ學力かあるも今一方の女子ハ教育の緒て御座まして漸く始て小學校にでも入るか或ハ幼稚園に行て種々の玩具を拵へ喜んておる位の教育の度であります最早小學校を卒る位の者と幼稚園にまで〳〵居る樣なものと一處に教育するとハ出來ぬと仝し事で今方々の御夫人方が大日本教育會に御入會ありても徹頭徹尾一から十迄此會で研究するとが直接に役に立て行くと云ふとハ出來ますまい其譯ハ只今申した通り教育の程度や緩急が違ておりますからです。

夫れ故に私ハ只今の所でハ別して大日本教育會の外に婦人教育會が要用で是非なければならんと思ひます此事ハ私が今日只今考へ起したとでハ御座いませんで既に大日本教育會か立ちまして七八ヶ月ばかり立てから思ひ起した譯で其時に存じますにハ此間大日本教育會と云ふ彼云ふ立派の教育の爲になる良い會が立たが婦人の方にも彼云ふ會を設け度いものだと思いましたが其時分ハ只思たバかりて御存じの通り至て意氣地なして御座ますれバ其を言張て起すと云とハ出來ませんでした又退て考へましたに此の東京にハ幾許も教育に熱心なる先生方が澤山あるが婦人教育會の御催のないのハ如何云ふ譯か仝く時節か早く時節の來ないに無理に引起すのハ反て害にあるからでざいませうかと存じまして遂に今日迄默して居りました處か明治二十一年の今日に至て斯云ふ立派な會が立と云とを聞き嬉く思て此會に這入りました先此れが私が本會に入りました大趣意で御座ります就まして私ハ無學文盲で御座ますが此會の爲にハ皆さんと共に盡力仕樣と思います。

偖私ハ今日誠に自分勝手の事のみを申し上て濟まぬとで御座りました猶此席を下ります前に私が皆さんに向て一ッ申上度い事が御座ります其ハ何だと云へハ餘の事でハ御座いません教育會ハ前に申通り婦人に必要なる親切の會で御座ります故に婦人に教育が入らなければハ致方がないが入るものなれハ何方も御入會に成るが宜らうと思います故聊か此の會に這入りましたる趣意を申す序に併せて諸君さんに此事を御忠告致す譯であります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○衣服のはなし

緒方正規述　佃與次郎筆記

左は一月廿二日大日本婦人衛生會にて演述ありたるものなり。

私れ本會に始めて出まして御座りまするが今日御話し致しまするのハ彼地等に掲げてある通り衣服のとに就て御話し致す積りで御座ります。

衣服とは即ち着物でありまして着物と云ふものハ何の爲めに用ゐるかと云ひますと我々が暖かきために用ゐるのでありますす我人及多くの動物は一定の暖かさ即ち温度を持て居るので温度と云ふものハ誰でも人でさへあれば替りません之を躰温と申します此躰温は我々の生活して居る所の働きの重なるものであります然して今極めて暖き所の假令ば赤道直下に住つて居る黒人の暖さと北極の近傍で極く寒き所に居るイスキモと云ふ人種の躰温を比較すれば其差が少しもありませず寒暖計で計つてみますと一度の十分の一の差も御座りません此躰温を攝氏の寒暖計で計つて見れば何時も三十六度半から七度半の間にある勿論朝夕の間で少しの替りはありますが三十七度半を昇るとはありません次に人の外に在る所の空氣の温度を計つて見るに空氣の温度ハ熱帶地方に於てハ四十度位いで人の躰温より三度も餘計ですが北極即ち蝦夷よりもモット北の地方の空氣を計つて見ますと零度以下四十度ぐらゐですが其處にも矢張人が住つて居ります是れに據て考て見ますと人の住居得る所の空氣の温度と云ふものは即ち百度の間で御座り升○度以下四十七度の所にも住まゐ○度以上四十度の處にも住へるので容易く言へば氷水の中の温度と沸騰したる湯の温度で實に空氣の温度の差は誠に大なる者でありますす(未完)。

叢話

○詠歌論

佐々木健

凡そ人の身躰ハ一度働けバ一度ハ之を休め勞と逸とを相交はらしめざるべからずもし長く双眼を使用して晝夜休息せずんば遂に眼病を起すべし人の腦髓も又是に同じく利を營む時あれば遊觀を爲すの時あり理屈を考ふる時あれば文雅を爲すの時あり一方に理屈と貨殖の爲に詰りたる人心を一方にて展べ緩るの道具ありてこそ世の中の調子も整ひ行なれ此の人心を展べ緩むるの道具の中にて尤とも優美にして腦髓を休息せしむるに適當せるものは和歌と云ふべし歌は人の腦髓を苦慮憂患の世界よりよく別天地に移すの力ありと云ふべし。

我心の樂しき時に當りて樂しき歌を吟ずれば我心の樂を添へ又我心の悲む時に悲むべき歌を打吟ずればかへつて我悲しみを慰さむるに足りぬべし悲壯なるものは以て慷慨の心を養ふべく豐富なるものはよく哀傷の心を和ぐべき功能を持つものなり。

白銀も黄金も玉も何にせんまされる寶子にしかめやも、」といふ歌をきけば親の子を思ふ情を知るべく「うれしさを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてといはましを」といへば其の和樂なる心言外にあらはれ「道のべの清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立とまりけれ」と吟ずるを聞く時ハ己れが夏の暑き旅行せし時の有樣は忽ち其胸中に現出すべし又「沖つ風吹にけらしな住の江の松の下枝を洗ふ白浪」と打ち吟じたらんには海邊の風景我眼前に見るが如き心地するなるべし。

世に美術と稱するものを類別して二つとす有形の美術無形の美術これなり有形の美術は繪畫彫刻建築等をいひ無形の美術は音樂詩歌戯曲の類をいふ有形の美術は形を主とし人の眼に訴へ又音樂は聲を主とし耳に訴ふれど詩歌戯曲は主として心に訴ふるが故に其主腦とする所のものは形なき聲なき人間の情是なりこのゑがきがたく見へがたき人間の情をいとよく寫し出すが故に人も之を賞するなり則ち歌は人間の情慾人事の發跡及び外間の物象の事を述べて巧に人の精神を發揮せしむるの力あるものなり。

歌の他の美術より勝さる所以は佛人エ、ウェロン氏著エマテチック(美學)中に記せる一節を左に抄出すべし、

詩なるものは凡そ百藝術中に就て人情を叙寫するに於て最も自在なるものなり蓋し藝術之を大別するときは人耳を怡ばしむる者なり曰く人目を怡ばしむる者なり而して其人耳を怡ばしむる者は其人目を怡ばしむる者に比する時は人の感情を動かすこと更に大なり同じく人耳を怡ばしむる藝術の中に就て詩の人を感ぜしむるは音樂よりも甚だし然る所以のものは他無し他の諸藝は其用ふる所の手段は畢竟皆間接の手段たるに過ず何ぞや聲調なり條線なり此れ皆な自から意義を有するに非ずして作者僅に此二の者に於て其胸中有する所ろの意義を寄せて以て其感情を發揮す繪畫彫刻音樂建築の類皆な是れのみ詩に至りては則ち然らず其用ふる所の手段は即ち言語文字にして皆自づから完全の意義を有するものなり故に曰く詩人の其感情を發揮するの手段は直接の手段なりと（以上は泰西の詩ポエトリーにつきて論

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

したるが其の感情を發揮するは我國の歌も異なることなければ今これを引けり)。

しかして此の歌の風躰優美にしてよく細密なる人情を詠み出すれハ婦人の性質に尤もよく適合せることハ本邦よても泰西にても歌人詩人に婦女子のすぐれたるあるを以て知るべしされはおのれは當時女學校の科目中にこの優美なる歌の入りたる所あるハいと〱よろこばしく思ふになんいかで當時の女學生たちよ君たちの學業に勉強したまへる腦髓を休めんが爲に折〱は歌をもよみ出でたまひねかし」

さきつころ荻野由之氏和歌改良論を著はされたり見もてゆくにいとよくあげつらはれたれど猶いかでかと思ふふしなきにしもあらずされば荻野氏のあげつらはれたる歌格歌題歌材歌調の外におのが心つきし事をもそへてかゝげつ。

第一歌格　我國の短歌は三十一言にして意味單純なるが故に人情復雜文化發達せる當時はいかにも三十一言にては言ひつくしかたきとあるを以て今樣（七五七五と句を重ねたるもの）をいくつにもつゝけたるもの（今の新躰詩と稱する・もの）を用ひて泰西のポヱトリーの如くよく人世の情慾を寫し美術壇上にたゝんこそねかはしけれ。

第二歌題　歌の題は從來の四季戀雜詠史等の外に當時百般の事物又勇武なることをも宗教上のことをも道德上の事をもあるは深遠なる哲理などをも詠出すことよしとすへし。

第三歌調　ある論者は戀のみを專らにせず勇壯によむべしといはれたれど從來の歌も尤とも勇壯なる歌もあり戀も歌の題の一部分をしめたるのみかゝる論者はリツトン翁の小說にある經驗なき少年が詩人に向ひ此世の中に戀愛に心を傾むくるもの一人あれは午餐をたのしむもの千人あらん故に詩詞の大半は胃腑に訴ふべしよろしく天然に訴ふべし嚞微頬子などいへる套語をやめてビーフステーキを以て題とすべしといふが如きに至るべし。

第四歌材　歌は其餘韵風韵を大切とすべしありのまゝをよみたるをほむる人はたとへは寫眞を實際ありと賞して畵の妙をしらさる人の如し「このころは前のたな橋水にして人も渡らぬ五月雨の比」これはありのまゝにて歌にはあらずと古くよりよく人のいふ事なり發句にてたとへんに植木屋の自慢でみせるつゝちかなと云いては發句の味ひなしこれを賣家の自慢で見せるつゝじ哉と直したれば眞の發句になれりと讀者よく味ひたまへ。

第五歌の韵字　歌は其幽趣佳境を寫しあば則はち其本分をつくせりと云ふべし然るに泰西の詩には皆韵字をふめるを以てこれにならひて新躰詩に韵をふみて作れるありされど歌の骨髓は神韵にありていかでか區々たる韵語あどをしひて用ふるの要あらんや泰西にても英國の詩仙ミルトン翁は有韵の詩を排斥して無韵の長詩ブランク、ウパルスを工風しはじめられたり我國にては韵語などいふ械なきはまことよ幸あれば求て械に入るはいと愚なる事あるべし。

○ロイアル女子大學獻像式の演説

曩にホロエー女子大學の私立出來し兼てより茲に英國女王陛下の御像を建立せんとを願出て夙に其の準備を爲したるが去年十二月十六日には彌よ御像公示式（被ひ置たる覆布を取去るの式）を執行したる由あり扨當日皇女クリステアン夫人殿下及ロードグランビルの演説は女學に取りて尠らぬ關係あるものと評し女王雜誌等には太たく之を賛成したり因て左に十二月廿三日の倫敦タイムス新聞より右演説の筆記を抄譯し讀者の一覽に供ふと云ふ。

皇女クリスチアン殿下は恭けあくも玉坐を立ち給ひて、校長ビショップ孃を始め敎授の貴女達及生徒諸君よ私は今日招かれまして皆樣と共に在り我が母上の像を奉らん式に臨みて一言の祝詞を述べ申さずばなりません私は嘗て此校を立てられしホロウエー君と其夫人の像を上る式に列りましたが又今日は此の盛典に與ることを得ます誠に皆さんが國に盡すの忠と開校者へ對するの誠とハ愈顯はれましたこれにつきても非常に喜びまするハ此學校は啻に書物を敎ふる所のみならで各自の天性に從ひて其長ずる所を養ひ全成の淑女を養成する所と存じますからであります女子の高等敎育を主張致しましてハヶ間敷申せしは既に十五年二十年の昔とあり今日は更に其必用を見ません　イヤ却りて一方に馳せ過ぎあされた御方々も見受ますから少々これに反對の意見を持ちますも寧ろ我々の務かとも覺ふやうになりました然りとて私ハこれに反對を致す者では御坐ませねど今皆樣の前に立ち言はねばあらず又言を好みまする事は女ハ決して其女たることを忘れてハいけません又女の最も重なる德と最も強き力とは女らしいと申す文字の中に含みてあることを忘れてハなりませぬと申すことであります勿論私も皆々樣が學問をあされ心を磨きなさることは飽まで同意で御坐ますが多き人々の中には非常大望を懷きまして男子の境界にまでも立ち入り却りて其身の分

を忘れ尙甚しきハ獨り女のみに限りて有する權利さへも失ふ御方があるように聞きます決して高等の敎育を受け十分に智識を磨かれたから其御方が女の分を忘れて家内の治めが惡ひ幾何や歷史を學バれたれバ必す母とし妻とし娘として惡ひと申す譯はありませんイヤ〳〵斯る噂さへも聞く分もなく又聞たくないことであります今此學校に來り學ばるゝ姉妹達よ此大學の成功は只此中に生成する君達が身に顯はす品格と風儀に在ることを深く心に銘し玉へ我英國數万の婦女は皆目を擧げて此の幸なる境遇に在りて高等の敎育を施す此校より如何なるものや出づらんと日夜君等を眺め居れり嗚呼我愛する姉妹達よ願くは爾の學校と爾の敎師と殊に爾の女性たるとに對して十分に忠實なれ願くは慧われ柔なれ優雅なれ敬虔なれ去れば數年を出でずしてホロウエー君の宿願も達すべしさすれば君達も亦其恩を空うせじと愈稱せらるゝに至ります。

次にグランビル公は揖立して女生方に告げらるゝ樣ハ、

前略、、、ホロウエー君は細君の勸めに從ひ其遺念として一の學校を起さんと企てられましたが幸ひ諸方の貴顯有志の方々の御贊成に依りて立ちましたは此所にある此の廣大なる最も貴とむべき此の學校であります實に今年は我女王の寶位五十年の祝とて目出度き文や演說は度〻聞きもし讀みも致したが敎育事業の進步程目出度ものはありません誠に歷史に導かれて昔に歸り七世紀八世紀の時代を見れば女は男の如く能く敎育されしとあります彼のウイリアム、デ、コンコロルの娘セシリアは學者なりと記してあり其他羅馬敎に屬する女子の中には隨分各高き人もありしと見ます其より遙か下りますると只一のレデー、ゼーン、グレイの名を見るのみ勿論女王エリサベス、及びメリー、クイン、ヲブ、スコットの如き御方は既にヲテン學者として其名を聞きますれど其外絕て一人もありません其後下て近世に至れば女流社會も大に改り有名なる人〻も續〻輩出して學者もあり畫家もあり詩作家もあり音樂師もあり又三寸の筆を捻りて一世を動せし著作家もあり今我國に於る小說家に屬する人〻のみを擧てもゼーン、オステンありミス、ブロンテーありヂヨルヂ、エリオットありヂヨルジアナ、フユレルトンあり若其他の業務の人々を擧ぐれば數限もあらじ是必竟敎育の進步せしによる事です私がまだ小供なりし時分は勞働社會の敎育は殆んど無きが如き有樣にて女子敎育の如きは中〻哀れなる次第最も高尙なる女學校と申すも只音樂や畫學と調子外れのフランス語やイタリー語を學ぶの外終日鞠遊に

時間を費やしました且つ上等社會見識家と呼ばるゝ人々すら尙女子の教育に反對の意見を持ちしと見へ彼の著者とし道德家として其名高きエム、ヲメスツゥルは善良なる教育を受けし孃達よりは好言令色人を迷はす婦人は婚を得る早しと其娘に書き送り尙加へて婦女の身分として男子の假面を被り學問をする程大なる失策はなしと申しました又文學を以て名の聞へたる政治家某は甞て其娘が作れる詩を見て其上乘の作なるに感じ再ひ作る可らずと命じたりコレ其娘が文學に耽りて其身を誤たんことを恐ました故であります然るに我女王の御宇とありては教育忽ち大跨に進歩し大中小學の組織も大に改まり女子に對するの感覺も大に進み最早今日となりては神の吾人に與へし能力は只男子のみこれを發達するの權ありと信ずる者もなく前きに女子の教育に反對せしは我等が威勢を張らん爲めなりしと悟りし吾輩男子が始にて「女の欲する業を爲さしむるなかれ彼等か爲めに備へたる業はなし若し女をして自ら好む所を爲さしめば遂に我等が意に從ふなきに至らん」と言ひしを恥づるも亦吾輩男子が始めなり然れは女子の教育は頓に進みて今は上下の區別なく一般に行はるゝ事となれり就ては女子諸君も大に奮發し或は大學に入り高尙なる學科を修め男子と智力の競走をなし或は男子に勝るの人もあり女子の爲に設くる事業は年々に增加して心意上形躰上の働きは愈盛となり今にては啻に意匠を高くし智識を啓くの力あるのみならず書記生、時計師、印刷師、製本者として世に貴ばるゝに至たりましたが茲所に又僅かの不平が聞こへます其聲は至りて低く只女に學問をさすれば倨慢になると心配することであります此は既に百年の昔ドクトル、ジヨンソンが「若し一人の村童にレース付の短胴を與へなば頭を振れど若し惣ての村童に與へなばこれを受くべし」と申しました通りです此の外に聞く反對は女子の大學教育は其良人に對し其小供に對し且つ其家族に對し拂ふべき義務を怠らしむるものなりと申す人もありますが吾等の經驗は是を眞と申しますか否々彼レデー、ウイリアム、ルッセルを御覽なされ實に巧捷なる家政家でありましたが又實に高尙なる教育を受た人でありました僅二本の指端にて歐洲の文學を動せしと申す位勢力のありし學者でありました又申し上るも實に畏けれど茲所にまします皇姫殿下は甞て一冊の書を著はし玉ひ貴く且つ有益なる勸告を女子諸君に與へしは諸君も定めて御承知ならんが殊に諸君は殿下の其良人に對し其子女に對し殊に社會の公益例とへば今日の式の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如きに對しては常に十分の力を盡し玉ふことを知り玉はん又或る人は教育を受けし女子は外見を好まぬ故にや常に見醜しき風躰を爲すと申す若し女として見苦しき躰をなし不釣合なる色合を着けなばこれより大なる過はあらじと余は信ず然れ、ど此の流の子女必しも教育を受けし人に限るとは見へず苟も學校に入り而かも高尚の教育を受けし人にして無智文盲の女子よりも美妙の念が乏しく衣服の裝も見苦しく荒ふしとは受取られぬ事否な余は斷じて信ず高尚なる女子の教育は金錢に依らず金錢に動かされぬ一種の美麗を買ひ得べしと余は今日此の大學に來り我愛する諸君を見るを得ました願くは諸君諸君が心身錬磨の結果は男子の上に見るが如く亦同しく女子の健康に害なきのみならず却りて鋭氣を加ふるを證し玉へ又諸君はこれを證するに餘ありと信す今年の十月には廿八名の學生か入學ありましたが來る一月には多分の入學もあらん來る十月は尚多くの入學ありて愈〻余輩の希望を固くすることゝ信します我貴き皇姫殿下は吾人か殊に尊敬を表して設けたる椅子にまします皇子殿下の名の爲めに余輩に一言を許し玉ふと信すア、我愛する諸君よ願くは我校をして長く我女王の誠實なる婢となり我大英國の有益なる市民と爲り敏明なる思想と活潑なる身躰をもてる貴女淑孃の源泉となり玉へこれ殿下の望ありこれ余輩の望なり諸君旃焉。

○過去はなし（其二）

高橋おろか記

さて帶地は何時ごろより織出せしか未だ知るによしなしと雖も紀元二千百二十年前より世にありしと見えて女房筆記に、古は帶六ッ割にてありし慈昭院殿御代より八ッ割になされし人によるべからず云々又豹文記に此事出たり（慈昭院殿とは足利義政公をいふ）然れば足利氏のときに至りては既に帶地なるもの出來て專ら用ひたると明かなるべし蓋し帶地は全幅二尺五寸丈一丈二尺に織出せるものなれば此幅六ッ或は八ッ割となすときは其幅四寸以上三寸以下にして幵を二折に縫括用ゆるとすれば帶幅二寸内外にて後世男子の帶と一樣なるが如し然るに豐臣氏のとき一倍廣くなりしが如く大幣と組の歌に、京では一條やあぎやが娘よつわり帶をたすきにかけて（この歌文祿に行はる）などの語あり是此時に及びては其幅大いに廣くなりたれども唯帶地のみにて他の布を用るに於ては三ッ割とし絹、羽二重の類は二ッ割と定れり其うち高田樣と稱へて流行を極しは三ッ割をまた三分狹くけたる帶にて其幅二寸二分なり又同時に組帶と稱ふるもの流行せり是は絲を

絎にし兩端に總をつけたる帶にして其色、白、紅、青、黃、赤、等の彩色あるものにて多くは夏の帶とす骨董集に、昔肥前の名古屋にて唐糸をもて組たるゆゑに名古屋帶とも又組帶とも云しと或人いへり云々按ずるに此組帶は韓組帶の遺制にやあるべし和名鈔腰帶類に曰く、辮帶（和名、加良久美）絲を織て帶となす也、とあり源氏（梅枝）に、だんのからくみのひも、と云ふと見えたり是れは卷物の紐を云ふところにて帶を云ひしにはあらざれども又た其證とするに足るべし然れども絎の名古屋帶は寬永以後（紀元二千三百年代）やゝ廢れたるが如く貞京より享保のころの草紙に見えたる組帶、名古屋織の帶、糸打の平帶、名古屋打の房帶は寬永以前の如き丸打にはあらず平打にて今いふ眞田の類なり竹齋物語に（寬永中の書）折ふし上人うちにましく〳〵てそれにさふらへたゝ今まかり出んとて出たゝれける裝束はあやかにこそ見えにけれ膚にはひざやのあはせをめし上には鹿子のきははくに紫小袖をめすまゝに御衣は緋縮緬帶は天下にかくれなき二條通りの百足屋が上人さまの御帶とて取わけ心をつくしッゝしんくの帶の八ッ打に金紗をまぜてぞめされける云々其他椀久物語、入子枕、に名古屋帶のと出たれば此時代大いに流行せしと疑ふ可らざる也。（未完）

小說

○奔彪榮華の夢

“Last Days of Pompeii.”

英國　笠頓先生　原著
日本　靑笠小史　譯述

第五章　埃及の亞伯設西

今もし此所へ來る人の形樣を熟視せば年齡は四十路を一つ二つや越つらん身材高く瘦形にして夫と言ねど神經質との看板打たる筋骨を凸く面に顯はし銳き鈎鼻に上唇を俯視せたる其唇其傾とも稍希臘人に肖たる所有る樣なれども彼等（希臘人）が固有の壯年の後に至るも猶少年の時の如く顏容豐富にして光澤あるには似ず肉落て皮涸たり殊に其眼の趣味も無く大きやかにて徒に煌々と光る樣と此色の靑銅めきて黃色に黑色を帶る躰とを見れば問ずして其海東の埃及人たる事を知べし虞朗加士と苦弄日亞士は遽に起て此人を迎へしが其樣子の謹儼にして圓滑あらず徒らに歡喜を裝いて冷淡の情を隱さんとするが如きは蓋し中心より融解たる交誼ならずと推せられぬ其は此の埃及人亞伯設西が年齡の違ふと、料見の頑固しきと、許多の富を有ながら博奕に手を出さぬと、今一條は此男他を呪詛ふの惡性ありと云ふよ因て此方の二人も其を敬して遠ざくるの意に出しものなるべし

亞伯設西は冷淡なる地銕の上に謹直なる鍍金をし是に少しく倨傲なる氣色を加味して兩個に對ひ「應、兩紳士此に在す歟我が快活なる苦弄日亞士君又た尊嚴なる虞朗加士君を彼の愉快なる市街より誘ひ出して此の寂寥の地に徘徊せしむる海神は蓋し絶世の美容を具へたるものと言ふべき歟、と彼の煌乎とせし巨眼にて虞朗加士を後目よ睨み忽ち呵々と打笑へば　虞「足下何故に左は啞ひ玉ふ抑も此自然の景色は通例左ばかり人の賞翫を引ぬもの歟、と難ずるを亞伯設西は猶冷笑て「然り世の遊蕩にのみ耽る和郎等には……　虞「呀、此は近頃驚きたる嚴酷の御答かなさばれ其御答は決して眞正の道理を盡せし完全の的とは信受ず原來遊樂なるものは物の反對を好むものなり故に管絃の噪しき境に居る者は常に嵐響鳥音の閑寂なる地に遊ぶを好み山聲松籟の寂寞の局に潜む者は時に舞踏熱閙の塲に上るを喜ぶに候らはずや　亞「學園の少壯哲學者連中（弗列答の門弟達）には左樣の考へを起せしも有らん然れども此は厭倦と禪定（靜に考學するの意）とを取違たるものにして畢竟彼輩は世間の事務に厭倦たるより閑寂の樂みを知る如くに成れるなり然れども能く想ひ見よ彼の造化が節儉し愛惜して蓄積せる秘庫の中より那の言語に絶したる美麗的物件を引出して己が遊樂の料とするには又之を引出し得る程の熱心と云る的無くては叶はず然るに彼の世務に厭倦せる無氣力輩には爭で此の熱心の有るべきや抑も造化が足下等に望む所は世務を勤めず人事を省みず己が儘に情慾の快樂を盡せと言ふには非ず唯好く自個の熱心を奮ひ起し自然を尊敬して事に從ひ而して其美麗を見ることを得て心に樂めと云ふ事なり、故に……雅典の少年よ、月が彼の燕地密恩（古詩中の一人物）の頭上に出現して彼が其皎〻たる光輝を望み得るは恰も一日の路程を經過せし後に非ずや即ち人事の匆忙しき市街熱閙の間に非ずして靜かなる山寂しき谿に行き着りたる時に非ずや　虞「何樣立派な比喩なれども其引例の適當を得ず……ナニ倦厭た……其は老人の言ふことにて我輩少壯者に適する文字に非ず現に斯く申す我々共は厭倦など云ふ念を唯の一瞬時も心に感ぜし事あらぬは

亞伯設西は之を聞て再び苦々しく氣に笑たるが此笑を寒暑針もて測りたらば其寒冷なる零點以下にも達すべく殆ど生氣を凋落せしむるに足る者あり既に彼の想察心の皆無（銕面皮）と云へき苦弄日亞士すら一時此笑の下には凍り着て頭をも擡ず然して此笑の主（亞伯設西）は右の熱心ある雅典人の辭には應せ

ず少時ありて靱軟なる沈鬱せる聲にて言様「結局足下等は自然が君等の爲に笑ふ間(少き時)に娛樂たまへ薔薇の花は速に凋み香氣は忽ちに散ずべし…併し虞朗加士君惣じて吾ゝ他郷の客には歡喜と悲哀との二の者精神の大部分を支配せり而して足下は其の歡喜をのみ受け盡し我等は右の悲哀をのみ身に受るものならん。此時雅典の少年が美しく爽かなる眼は忽ち暗涙の雲の爲に覆れたるが聲を放ちて叫ぶやう「噫亞伯設西君我等をして異郷の客たる感情を心中に起さしめ玉ふな希くは羅馬の外に嘗て古昔自由の國が有たりとの事を忘れさせ玉へ吁嗟々々上天よしや徒爾ともあれ我等をして麻拉敦及び塞莫弗禮(共に希臘人が大捷を得し戰場)の曠原より希臘國の靈を喚起さしめ玉へ。亞伯設西は今回は稍心底よりの笑を出して「君が今の詞に據れば今夜の宴會には麗西(羅馬の美女)よりも雷那(希臘の勇婦にして神となりし者)の像を席上に飾り玉へ…然らば…と云ながら長き上衣を腰に纒ひて悠々として立去りぬ

其後影の漸くに遠ざかる頃苦弄日亞士は吻と云ふ息を吐て「ア、苦しかッたヤレ〳〵漸と息が吐る樣に成た我々の仲間の酒宴には時々洒落に骸骨を饗應に出す事があるが彼處に行きつゝ有る奴杯が宴會に出掛たらソレと同樣與も面白味も醒て仕舞て花麗爾尼安の美酒も忽地に酸敗するだらう。虞朗加士は沈思しながら「不思議な人物だ、遊樂の事には死せるが如く現世の事には冷淡水の如しだが…併し世間の評判に據ば左樣でも無い、其家の樣子を見ても又當人の內行を聞ても其とは丸で反對の相違を現はすテ 苦「左樣々々彼の瀟洒た邸の中で時々酒宴の笑聲が聞える樣だ、が、評判では奴は餘程の豪富で…ア、奴を我々の仲間へ引込で博奕の面白さを教へて遣る事は出來ないか…噫遊樂中の遊樂、一喜一懼の熱情、口にも咄にも乘ぬ程の面白味、嗚吁汝賭奕の神は如何に美麗に且愛嬌ある神なるか、と詩の如き詞を呻り出せば虞朗加士は愉快氣に笑ながら「コレ〳〵吟靈に感じたか〳〵巫は苦弄日亞士の身に托して妙詩を吐せた、實に妙々ア、…今日は諸事不思議づくめ、此次の不思議は何な不思議か早く我等は聞たいものだ

○小說神髓　(第一編)

蘇格氏著ケ子ルヲルス　(第三回)

此の夕べレスター侯果して公けの裝束し勳章いかめしく飾り着けて來遊ありぬラブサートは之を見て喜こぶと限りなし侯

怨じて申さるゝは君も亦た外面の衣服裝飾をば愛せらるゝにては莫きか何故に今夜は斯く迄でに喜び玉ふと云ふラブサート恨めし氣に答ふるよう此は眞につれなき御言を承まわるものかな初め君を見參らせたる時は只だ卑やしき賤の男に御身をやつして居玉へりしときにては侍らずや妾わにして若し君の外面を愛するとならば何故に斯る時に於て御慕ひ申上んと聞ゆ理わり聞こえて最と哀れなりけり。ラブサート又た申すようは兼て度々のように申上るは恐ろしけれど今すでに斯く思はれ奉りて眞の妻と成れるものを何故に早く世に公けには爲して玉はらぬにや之のみ殘り惜しう候と云ふ侯は哀れとも思ひ乍ら君かく迄でに盡す余が眞心の通ぜざる乎すでに王殿と變はりなき程に宮室をしつらひ斯迄でに君をもてなせども尙ほ遺憾と覺さるゝにや、然し若し妻と爲し玉ふて愧かしうならずば何卒早く公けにし女王の御前にも案内して玉はれと云ふ、侯はほと〱嗟歎し御身は未だ朝廷の事を知らざれば左様に慕はしう思はるゝも無理ならず今若し御身の事を言上すれば此迄の事は悉く余が失策となりて女王の御怒りの程も恐ろし暫らく忍んで余が申し出るの日迄で待ち玉へなど慰さめたり。

此夜はフホスター、パーチー、等をも召んで共に會食しぬるが宴の酣なわなる比ろ侯は憮然として歎じ胸に懸たる勳章を重しとして掻い遣り棄つればパーチー惜し相なる眼附にて瞥見し乍ら黄金ならば殿重い方が宜しひでは御座らぬ乎、イヤ否勳章も高位も何にせん王宮の勤務は喩へば躬ら身を縛りて籠中に入る鳥の如し斯る不自由なる束縛を蒙りて日夜に氣兼苦勞を爲んよりは寧ろ速かに身を退いて此の片田舍に隱れラブサート等と優々悞樂するに如かずと云ふパーチーは又かと云ふ顔附を爲乍ら口をとがらせて辨ずるようは若しも斯の如くならば是迄の殿の御辛苦は悉く無益と爲り申さんたゞ喜こぶは殿の敵にして殿を退けて獨り威勢を張り遂に御一身をも危ふくし申すべき乎そも〱殿朝廷を退いて身を閑散に置き玉ふ曉果な何程の樂しみや候べき女王の御前には二つとなき權力を打棄て乍ら片田舍にわび住ひして或は村酒に頬を赤くして山野に獵のなぐさみを爲されたりとも現今の榮華に比ぶべき愉快は候まじ殿にして若しラブサート夫人の事を秘し專ぱら女王へ忠勤此上とも怠り玉ふとなくば元來女王はおのようにて王躰御弱はくましますに付一朝不豫の事あらん折は儲位よ登らん人の或は殿の上に定まるやも知る可らず斯程までに

末樂しき朝廷の勤めを今にして乍ち怠り玉はんとするは眞に宜しきを得たる御處置とは思はれ申さずと諫言す、レスター侯は聞くが中に名譽の心勃々として起り愁情を散じて又もや前途の望多きとを樂しみパーチーなかりせば吾れ早くも豚と成るべきにと云ふ、パーチーそと傍らを向いて冷笑ひ扨ても／＼説易き人物かな　志は高く見へてもサスガはお人よし也吾れ若し此人を器械にして出世の楷と爲さば他日何如んぞ今日の儘にてや在らん彼のクロムエルも匹夫より起りて王位を得たり侯にして一朝女王の御氣に入り…万一にも女王の寐殿に侍んべらるゝ人とならば…吾すなはち侯伯の出世をも爲すべし然り／＼と胸算用をしながら夫にしても彼のラブサート吾が望をも適へくれず若し又吾が大望の妨とも成らんには可愛相なれども斷行せずばなるまいなど心を定め扨てコチラを向いては巧言甘まく酒勢をつくろひ笑ひぞゝめきて侯を悞しませけり實に恐るべき人物なる哉。

翌朝と相成れば惜しき袂をも早や分たざる可らず侍ち奉りたる心の切にてありしゆえに今ま一夜にして御歸し申すとの恨めしきかな特に今朝は何となう遺り惜しく常よりも御別れの悲しきかな今しばしにてもど御止め申したけれども若し夜全く明けて君の御姿が人に知られなば由々しき事なりと覺悟しやう／＼に袂を離ちてヨヽと泣く侯も躊躇して容易に立ち去りがたかりしにパーチー等にはげまされて漸くに心を取直ほし常もの如く身をやつしてパーチーの奴と爲り其の伴をして見かへり／＼心のこして歸り行きぬ。

扨てトレッセリアンは前の宿屋に歸り其夜はまどろみもせず色々に考へたるが此より先きパーチーは彼のマイクを召び出し速かにトレッセリアンの後をつけさせ彼奴すでに吾々の本塲を知りたる上へは止を得ず手荒らき仕事をも爲ずばなるまじ切度油斷なく尾行して其の行く先きを突き止め來れと命つけたればマイクは見へがくれに其の後を慕ひ來たるに又もや優々として彼の叔父の家に入りたれば其夜は自身も亦た叔父の許に歸りトレッセリアン二階に臥したりと認め置て其身は下に打伏し用心怠りなくガンバリ居たり。

佳傳

○オリムピア、モラタの傳

其翌年の春となれば良夫グルンスレルは無事に歸國せしが再びオリムピアを携へてヂヨルマニーに移居の運に至りたりオ

りムピアは住み馴れし故山の春を後に見て可愛母上兄弟に別るゝ事は悲しけれど至愛の神と我良夫と共に在らん限りは何かは恐れん何かは憂ひあんとて六月の日影未だ昇らず朝露尚ほ草頭に在るの時親戚故舊に別を告げエグシャの道に伴ひチーロルの市邑を横ぎりインスブルーグの兵營を後に見てババリアの廣原を下り遂にアウスブルグに到着しヂヨルヂ、ハルマンの家に泊りぬ暫する間にオリムピアが名、街中に喧びすしく其文學の譽を慕ひて訪ひ來るもの多ければ最とも快樂なる月日を異境の天に暮したり

妾は友なき異境の月日を見るも終日ムーゼスと共に遊び少しも他事に心を亂し申さす殊に心を潛めて聖書を味ひ文園に得るの快樂よりも倘能熟したる果を得んと務め居候故にや此所に暮し候事實に樂しく存居候」とはこれグレゴリー、ギラルドスに寄せし書信なり又次でコエリチ、セコンド、キユリチに一書を認め聖詩第四十六篇をグリーキ語に譯述してこれに添へ送りしにクユリチは傷く其芳情に動かされ「我が女性の榮にして我か女流の花なる爾チリムピアよ君は我か斯くも久しく無音に打ち過き斯くも遠く隔り在るゝも拘らず御余を忘れ玉わで殊更茲に一書を玉わりて舊情を暖められんとすこれ深く君に謝する所あり」と返詞を述へ次て其譯詩ゝ就きては「…君にして若し倘ほ長く其書を手にして其功を積み玉はゞ吾人は又何を苦しんでか彼のピンダル(希臘の詩人)の後あきを恨まんや進め我友オリムピアよ勵みて進め詩神ムーゼスは君を待つこと既に久し矣進め進め進みて爾が頭に桂の冠を載せよ爾か前に流るゝ詩の清泉は其味ピンタルの流れより甘く以て君か渴を醫すべく以て君か氣を養ふべく又以て君の足を健ょして以て君に勝を與ふべし進め進め進みて退くなかれ退きて敗を取るなかれ、とはげまし遣はされぬ

オリムピアは万里異境の天に在りて家を思ひ母を思ふの情轉た切にして旅窓の愁禁し難ければ筆を取りて

……妾は片時だも母上の事忘れ難く夢現に御顔を拜す度々に候誠に妾が母上を思ひ參らすことは君も能く知玉はん妾は母上のこと思ひ出す毎に妾が母上は眞に妾が母上にましまして信仰厚く愛心深く實に母たるの務を盡し妻たるの分を全くし玉ひし母上にましませしと思ひ候故にや母上の爲めに祈る祈もそのづと篤く覺へ候願くは尊躰健かに渡らせられて天授の壽を保玉はん事を妾は滿心の祝福を捧げて金冠を母の頭に載申さんと望み居候君妾か手書を母

上に渡し玉ひて此言を告げ下されたく且つはキリストに事ふ心地して母上を厚く顧み玉はん事を切に願上申候

とルッカに書き送りしが良心の自由を得て全心神に事ふるをもて更に勝りたる樂と思ひ殊に最も愛し最も信ずる其夫と共に在ることを思へば少しも旅愁なきに似たり

神は妾に妾が生命よりも貴き良人を玉ひて妾に結び付け玉ひたれば妾ハ妾が生命を愛するよりも一入深く我良人を愛し申候去れバ嘗てアルプスの雪を蹈みしも我良人我と共に在しますと思へば少かも傷み申さゞりき如何んぞ西の方北の極人なき境よ至るとも厭ひ申すべき山川谷の數々ハ皆これ妾が勇氣と愛心を示す里標と存候……

●寄書

○文苑

鈴木弘恭大人撰

朝雪　　跡見　節子

朝ぼらけしばしかゝげてながめましをすの外山にふれる白雪

夕雪　　土屋　峰子

入相のかねの音きこゆ夕月のかげかとばかり降れるしらゆき

同　　土屋　都子

曇りめの夕べの空は名のみにてゆきのいろのみくれ殘りけり

春氷　　古宇田淑子

日かげさすかたへは解けてかたへのみ冬をのこせる春の池水

山家梅　　永島なか子

山里に離れかきて見む梅のはないろさへかさへ今さかりなり

野鶯　　齋藤　仁子

鶯はちりゆく梅を惜しむとか聲のかぎりを野べになくなり

同　　跡見せつ子

惜しみつゝ鳴にやあらむ鶯のこゑにだに散る野べのうめが枝

同　　平尾　竹子

花もまだにほはぬ野べを鶯はうながしがほになきわたるなり

同　　松野鐵千代子

春の日の名におふ野べに宿しめてこゑものどかに鶯のなく

同　　萬里小路富子

梅の花さかずながらも春の野に人をいざなふうぐひすのこゑ

同　　三條　富子

朝なく〳〵野べになくなる鶯はきけども聞けどうれしかりける

同　　片岡　君子

春きぬと霞の關やこゆらむまちかき人にうぐひすのなく

同　　田邊　朝子

霞たつ春日の野べにうれしくも今朝うぐひすの初音もらしつ

同　　跡見　桃子

若菜つむ野べはいづこと問ふほどにこたへかほにもうぐひすのなく

野遊を促す消息　　佐々木綱子

此の頃ハ空のけはひいとうらゝかになり侍りぬ春の日かげと共に野べのわらびのやう〳〵のびゆくらむをいかで一度ゆきてをらまほしくこゝろおなじみ心にもおはしまさばうれしさハこぼるゝばかりになむあなかしこ

梅見に誘ふ消息　　神田　琴子

霞わたれる空の長閑なるに遠近の梅もさきそめてうぐひすの聲さへうれしげなるはまたなき日頃なりかしさても君にはいかに思ほし給ふか幸ひ明日ハ日曜にあたり侍ればあさまだきより御車よせさせたまはずやともに梅見にものしてむとてとみなる事ながらかくなんあなかしこ

をりにふれたる消息　　森　むら子

一ひらのふみさゝげて萬のみけしきうけたまはり侍るきさらぎの空にはなりはべれど此の頃の寒けさいかにおはしましたまふらむかねて待たれ侍りし梅もやう〳〵に咲りぬれどうぐひすはさむさにこもりたるにやまだ一聲だになのりはべらずされどこなたにも事なうくらし侍ればおこたりのつみおほしゆるしたまひてよをりからのおぼつかなさにみありさまうけたまはらまほしうて拙き筆ながらひとこと聞こゆるになむあなかしこ

●新報

○大隈伯爵夫人　同夫人は是まで別に日を定めて人々に面會せられしとなかりしが去る廿日の月曜日より毎月曜日午後二時より五時までの間に面會さるゝ事に定

められしとのとなり

○美術擴張　宮內省の官省中には從來美術に關する條項を設けあるが今度九鬼公使の圖書頭に兼任したるに付いては一層美術の擴張を計らるゝ由にて夫々着手の方案を取調べの都合なりと云ふ

○美術談話會　近來美術論盛んに行なはれ二三新聞にも其說を掲げ世人も餘程注意することゝなりしが京都の畫家中には東洋美術の眞相は手術的熟練的にあらずして一種高妙なる氣韻に胚胎するものなれば决して西洋の美術と其の歸を一にせざるものなりとて近日美術談話會を開らき其の意見を公けにせんとの計畫ありと

○女子教育獎勵會　曾て本誌上にも記るせし如く伊藤伯土方子幷に岩崎澁澤其他朝野內外紳士の計畫にかゝる同會の女學校は愈赤坂門內舊雲州邸內に設くることとなり女教師英人六名は既に本國を出發し三月中旬には來着の筈にて着後は早々生徒を募集して授業を初むる都合なりと女教師は此れまで英國にて高等なる女學校の校長教授たりし人にて中にはケムブリッヂ大學の卒業生もありと云ふ又同會にては學校と聯絡して貴婦人の俱樂部を起し他の婦人と雖ども西洋風の生活禮式交際家事等の摸樣を知り得る道を開くべき計畫ありと

○演藝矯風會の發會　此度文學美術に志尙ある人々の發起にて演藝矯風會なるものを設ふけ小說演劇歌曲音樂に關する諸弊を正し高尙優美の域に進めんとて去る十九日發起者賛成者等九段富士見軒に集つまり其の發會を祝せり其人々は加藤弘之細川潤次郞出淺太一伊澤修二等諸氏十數名にて晩食の時加藤細川伊澤三氏の祝詞あり本會は是れより其の實施の手續を定め次第西洋のミュージックホールの如き一の演藝館なるものを建築し此所にて改頁又は新作の演藝を興行し雜誌をも發行して演藝に關する批評論說著述等を編輯する運びなりと云ふ

○縣會の婦人席　群馬縣會にては此度議員木暮武太夫氏の發議により婦人の傍聽席を設ふくることに決したりと

○橫濱フェリス女學校クリスマス　同校は米國よりの贈品來着の爲めに不得止去年末にクリスマスの式を擧ることを得ず段々と延引して漸く去る十日の夜に於て催うしたり當夜は例の如く生徒方の演說暗誦唱歌等あり何れも善く出來たるが分けて面白かりしは「論語」「リードル」「はりばこ」の三人の對話にして右三人いろ〳〵と苦情慷慨歎息などを致しいつそ脫走せんか又は支那西洋などの本國に立歸らんかなど相談最中に「机」と云へる一人物突然机の下より現はれ出でゝ之を止るとの趣向にておかしき間だに教戒を含み當夜第一の出來なりし

○婦人矯風會雜誌　同雜誌はいよ〳〵來月より刊行の筈にて編輯委員は淺井作子佐々木豐壽子の兩女史にて編輯及發行は吾社の人々にて分任すべき筈なり

○哲女館　赤坂新坂町に設ふけたる哲女館は英學、裁縫、編物、諸禮式、音樂幷に料理法を教授する目的にて其の教師は婦人教育の事に經驗ある內外の婦人のみを用ひ男子は一切用ひざる由館主は久しく米國に留學し歸朝の後は常に婦人教育に從事せし大杉謙子なりと

●海外女事

○女子投票權　此頃の米國ウーマンスヂョウナルに云く英國の下院にて女子投票權に賛成の議員は一百五十五人にして全數の半數に過ると四十人なりと

○印度女學校　印度に於てサシタフエーに設立するデモナ印度女學校は三十萬弗の建築金にして凡り一百五十人の書生を教授する計畫なりと云ふ

○ビスマーック一婦人を恐る　と題するものを讀むに歐洲の或る新聞記者の說に彼の鐵王ビスマーックは皇女クラウン夫人殿下がビクトリア女王の跡をついで英國の王位に登ることを尤も甚しく恐るゝよしなり之れ萬一にも此如くならば此人夫殿下の御氣性として速かに獨專政治を廢し國民の輿論を公開し尙ほ日耳曼に對して種々の特權を要求せらるべく必竟ビスマーックが尤も好まざる所ろのものを悉く好ませらるゝに付ての譯なりと云ふ

○小供のはなし　（第三回）

忠義の家來二人

坊や孃やお前方忠義なお家來が欲しくばイクラでも貰られますから温とおしくして少し母の言ふことをお聞よ、宅のお祖父さんが昔し武者修行をして日本中をお巡わりなすつた時に或日路に迷うて偶と山の中へおは入なすつたとサすると或る谷かげに何んとも云へない大きな眞黑な男が雷のようなイビキをしてふんぞり反つて寢て居たから狐狸妖怪はもとより何如ある人間をも恐ろしがらないお祖父さんではありましたが此の大男は中々人間ではない身の丈け五六丈もあり手足は數百年立つた大木よりもまだ太といから先づ〳〵此樣なものには拘わらない方が安全だと覺召して其の傍をそうつと通つて行かれますと彼の大男は乍まちムク〳〵と起き上つてコチ

ヲを見た其の眼のするどひとは狼の目を二十か三十も寄せた程で口の大きなとハほら穴ほどでありましたからお祖父さんも思ハず身震るひしながら刀に手をかけてキット睨まるゝと彼の大男はしばし見つめて居たが思ひの外に優しひ顔付をしてニコ／＼と笑ひ急かに膝を直ほしてチャンと座はり兩手をついて謹んで申しまするに私はあなた樣のお出を幾年となく待つて居りましたもので何卒あなたのお使ひが願ひたいので此後ともお伴につれて下さるように其代り私は何なりともあなたのお望みの者は何如なるものにても差上ます若し御膳が上りたくば早速に差上ます若しお召が傷みましたらば直樣調へて進ぜます若し又お住居を定め遊ばすときには何如なる立派なる材木を以てでも御普請をこしらへますから何卒お使ひなされて下さるようにと言ひますからお祖父さんも意外の事と大層不審に思ハれて之は定めし狐狸のたぶらかすならんとも思し召したが元來大氣なお方ゆへ夫では使つても遣らうが何分お前のような大きな男では毎日／＼の扶持米が大へんに入るから困る己れも日本遍歷の身分で左樣な貯へも無いからと云つて一つ困らせようとなさるト大男はなほ／＼平伏りてイエ／＼其の御心配には毛頭及びません私はたゞあなたがお使ひ下さりさへすれば宜しひので食物衣物などは悉とく自分で調へますと申しますから夫れでハ何も申すとは無い望み通り使つて遣らうと仰しやつて子此れから此男は眞黒だから黒太郎と名を付けて方々へ連れてお歩るきなすたと云ふとでスルト其後は食べるものでもお召でも宿屋でも万事此の黒太郎がお世話をして少しも不自由をさせ申さず其上給金と云つては少しも欲しがらず又た此の入用とても皆な自分で出して居たと云ふとでお祖父さんは實に幸ひなお方でありましたお前方も定めし此樣なお家來が欲しひでせう若しコンナお家來があつたら何れほど樂しひでせう、夫れだのにまだ／＼此上にモウ一人ごく／＼忠義な婢を得て都合二人の家來を持遊ばしたと云ふお話ですが今晩はモウ遲いからまた此次にお話しゝませう、がお前方よく考へて置なさい此のやうな忠義なお家來は決してお祖父さん計りがお使ひなさるものではなくつて子お前がたでも若しをとなしくさへしたら必らず得られますよ、ダカラ其譯は次に言ふて聞かせます今晩はよく考へてお息みなさいよ。

○左に附錄とする者は米國バッサル女子大學にて世界の女況を取調ぶるに對し社友島田か一子が答文として寄送せられたるもの也

exceed in number all other departments; this, no doubt, is owing to the adoption of foreign costume by the ladies of the upper classes. On the other hand, hair-dressers, so essential for the elaborate native coiffure, have been losing customers on account of the adoption of the foreign style of hair-dressing by so many of all classes.

There are besides these, small private establishments for the instruction of foreign and native dress-making, foreign and native fancy work, embroidery, etc.

In the suburbs of Tōkyō and Yokohama, may be seen, through the open cottages, women bending over their work of hem-stitching handkerchiefs; and the foreign demand is such, that they seem to keep up a lively business. The Government Printing Office offers occupation for scores of woman, young and old, some of the most expert hands earning quite a large salary.

Literary culture has not yet so far developed as to enable women to support themselves by means of their pen. Ladies are legally debarred from the editorial chair, and comparatively few have attempted even contributing to the papers.

Of books, written, translated and edited by women, since '78 thirty-five are on the list before me. Few of them are in pamphlet form, and the literary value of the best does not begin to compare with the productions of literary women of our middle ages, some of which are still esteemed the standard works of Japanese literature. There is however, a pretty wide range of subjects, in these first fruits of woman's intellect, of the new era of literature in Japan, as the following list will show: two treatises on woman's rights, an interesting fact in one of which is that the author argues against the presumption that woman's rights are equal to man's two collections of poems; several literary miscellanies; two models on letter-writing; translations from Western biographies and stories; one Anglo-Japanese conversation; hints on dress-making and silkworm-raising; two novels; a translation of Beecher's Household Economy (not completed); one Elementary Text-book in Natural Philosophy, and a few others.

Glancing over the progressing civilization of Japan, one can hardly fail to be struck with its exotic nature. That social institutions of the west, so enthusiastically admired and eagerly adopted by us, are natural products of ages of experience; that some of these institutions have been established and maintained by throes of revolutions; that there are vital agents working out these favourable results, are truths, that many here have yet to learn. May our beloved country quickly recognize and accept of these truths and may Christian culture permeate her social texture through and through is the prayer of,

Your's sincerely
Shimada Kashi.
Isaac Ferris Seminary,

Yokohama, Nov. 1887.

learning has so recently revived. She is much better appreciated here than in the lands, where the governess is coupled in public opinion, with the seamstress. The number of female teachers are estimated at 5,011 while the male teachers are estimated at 97,931, according to the statistics of '84, a fair proportion, considering the dearth of female aspirants to other professions.

We are able, on good authority, to state that the present Minister of Education is desirous of placing properly qualified female teachers over all the common schools in the Empire. He is, indeed, reported to have said that, if sufficient number of female teachers can be trained and kept to their task, half of the work of his department would be accomplished. The revival of education has, of course, caused an increased demand for teachers, especially for those who are prepared to teach English. The graduates of the mission schools which have the reputation of the oldest and best institutions for the instruction of the language, are in considerable demand, and are offered positions in the best schools in Tōkyō. Of course the number of female teachers has conspicuously increased since '84. However, only a few thus far have been known to take up teaching as their life work.

There is at present only one licensed female physician; she is a specialist in female diseases and has a good practice. There are a few others waiting to be given certificates in a few months. There are schools in Tōkyō and Yokohama to train women in obstetrics and many women are choosing this profession.

Two years ago the musical department of Monbushō graduated three girls among the first class of graduates, several more have graduated since, and they are all employed as teachers of piano, violin and Japanese instrumental music.

Woman are turning their attention to fine arts also, both according to native and foreign styles. There have been a few whose productions have brought them fame especially in the water-colors. A considerable number are said to be earning their living by painting on porcelain, silk, etc.

A lace manufactory, established some years ago in Tōkyō, gives employment to many girls whose natural dexterity adapts them to this kind of work.

An industrial school in Tokyo has been already mentioned. The branches taught are foreign dress-making, foreign fancy work, mostly in worsted, painting and drawing, porcelain-painting, and Japanese fancy work. Those learning foreign dress-making

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

The mission schools early established in the different parts of the Empire have had a great influence upon woman's education and the result has been noticed as early as in '77, when they are honourably mentioned in the government educational report.

There is an industrial school in Tokyo, consisting of 200 pupils at present of which more mention will be made under the second topic.

Women have come together and founded associations for self-improvement and for mutual assistance. There is a reading society in Tokyo with 2000 members and various literary and conversational societies all over the Empire, all calculated to prepare the Japanese women for independent thought and action.

II.

Means of Independent Support.

A woman in Japan, legally, has no share in the estate. Nothing is set apart for her, except her personal effects: the trousseau given at her marriage is very rarely accompanied with a dowry, and that only among the higher classes. She is religiously trained to think that marriage is her only legitimate destination and the home of her wedded sovereign, her only available refuge. It is not to be wondered at that hitherto she has not exerted herself to procure any independent support. To be sure, there has been quite a proportion of women who have obtained a tolerable living by giving lessons in such accomplishments as tea-etiquette; arrangement of flowers in vases (native accomplishments); instrumental and vocal music, dancing, etc., as also others who have gleaned a meagre pittance in the more menial occupations as obstetrics, dress-making, washing, hairdressing, etc. Even the best occupations open to women have been, however, considered rather short of honourable, and she has followed them mostly from necessity.

Under the new era for women in Japan, this state of things has, of course, been revolutionized. Her rights trampled down and kept so with the weight of moral and religious sanction, together with the social usage of 25 centuries, can be successfully indicated only with the prestige of her material as well as her intellectual and moral worth.

Among a number of professions newly thrown open to women, that of school teaching may be considered the chief, both in respect to the number of those who embrace it and the honour paid to it. A great deal of preferment is shown to the school teacher in this land, where

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

the lower classes of people. Consequently, the attendance of girls upon common schools since '84, has not material increased when it was estimated at 1,013,851. The school age begins at six years, when children enter the common schools, and are taught the common branches. But a large proportion of them are taken away from school at thirteen years of age, and being kept at home are taught domestic duties preparatory to being married; or, as in the case poorer families, are either sent out to service or placed in apprenticeship. Of those who remain until they finish the higher grade of the common school, say at fifteen or sixteen, a few attend the normal and higher schools maintained by the government in Tokyo and the chief prefectures. Others attend the various private schools either foreign or native. Women are not admitted to academies and have only lately been allowed to take special branches in the University, where there are two female students at present, one studying Medicine and the other Botany. There are a few others preparing to enter the several departments of Physics, Political Economy, and Mathematics. The government issued a notification at the time this concession was made to the effect, that for a time, females would not be admitted to take the regular University course.

There has been a general increase of girls' schools in all parts of the Empire; it has been especially conspicuous in Tokyo where until '84, there were only eight or nine schools, there are now over thirty. All of these schools are full and flourishing, the attendance being from fifty to two hundred fifty. English is more or less taught in almost all these schools, and a great deal of interest is shown in the study. The grade of these schools corresponds to that of the public schools in America.

There is a great hindrance in the method of education in Japan, which none but those who are practically connected with it can fully appreciate; namely, the monotonous system of Chinese idiographs and literature, which the students must attain to a certain degree of profficiency as a means of communication of ideas. The Romanization society of which great hopes are entertained as a revolutionizer of the educational system, though quite influential, will not be of practical use to this or the next generation. More expedient modes of instructing Chinese may sooner or later be developed, but as long as the system remains, it will be hampering to the progress of education.

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

tioned the newly awakened interest of the Japanese press in the "Woman Question." Owing to stringent press regulations, among other reasons, the public has, for the last four years, shared less in political deliberation than ever. Opportunity has thus been afforded for devotion to other than political themes, such as social, educational, moral and even religious topics. The "Woman Question" has been the latest in vogue. Article after article has been devoted to the subject of woman's education, her capacity, her relation to man, and especially to the problems of her subjection and the judicial means for her emancipation. A tri-weekly paper was started in July '84 with the avowed purpose of being solely devoted to her cause. This was followed within three years by seven other periodicals of similar nature. Prominent men of learning with advanced ideas, contributed to these papers, and also published pamphlets and small books more elaborately discussing these and similar questions. These have been important and powerful factors to arouse the public to a sense of its immediate duty; namely, the education of womanhood for the improvement of the social condition.

In the third place, underlying and largely embracing the above two sources of influence, is the advocacy of woman's cause in the interest of modern foreign policy. The opening of the country to mixed residency, has been seriously contemplated, and it will, no doubt, be accomplished at no distant date. Perhaps, this may happen simultaneously with Japan taking her position with the European nations, in the dignity of a constitutional monarchy. This opening of the country, viewed from the point of the present low degree of culture together with the humiliating position of woman in her relation to man, has justly been deemed equivalent to inviting the people of the West to the exhibition of the nakedness of barbarism. Especially humiliating must be the criticism of Christian nations whose criterion of civilization is woman's positions at home and in society! Such has been the ground on which some of our most far-sighted and shrewdest men have advocated liberal culture for women; and some have even expressed their belief that *Christian* culture must be the ultimate agency in civilizing society and putting it abreast the much envied social condition of the West.

The revival of woman's education having thus originated in the upper strata of society, and being advocated by the more intelligent of the people, its influence has not yet permeated

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

新亞米利加

The Condition of Woman in Japan.

Having been asked to write a brief report in answer to the two questions "What is the present condition of woman's education?" and "What are her independent means for support?" I have written the following, relying for facts on the best available authorities and on my own observations. I regret to say that the latest statistics that I have been able to get, are those of '84, later returns not having yet been published.

I.

Education.

While the people of Japan have, from early times, readily acknowledged the importance and material advantage of higher education for their sons, and have withheld from them no opportunities within their means; they have, for a few years past, been considering the advisability of giving their daughters higher advantages in education than those which are afforded by the common schools. However, the question may be asked, "What has wrought these changes?" In general, it may be said that the knowledge of Western culture has given impulse to the national mind and has inaugurated changes that have brought powerful influence to bear upon this subject.

First, may be mentioned the institution of society among the higher classes. A decided departure from the old state of affairs. The strict seclusion from the outside world and an indifference arising from general ignorance of all matters not included in the limited boundaries of the domestic sphere, are no longer considered a part of feminine virtue. Wives have been received in public on equal footing with their husbands. They have also begun independently to form associations both for pleasure and benevolent enterprises. Indeed, conventionalities have been so far forgotten, that ladies and gentlemen have met at the Rokumei Kwan — an aristocratic clubhouse in the capital, maintained for the purpose of social gatherings, bazaars, etc.—to dance, and strange to say, the waltz receives its share of popularity. These social innovations in the upper stratum of society, made all the more conspicuous on the back ground of rigid social conventionalities and stern restrictions of old Japan, can not fail to influence society in general. These social opportunities, made accessible in proportion to individual culture and accomplishments, have caused parents to seek higher education for their daughters.

In the second place, may be men-

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢案内新設の事

女子に職業を與ふるとは當今甚だ緊要と存じ候ところ世に在る慶安と云へるものには弊害尠らず又た高等の人々は周旋の便利すこしも無之甚だ殘念と存ず因て吾社は此度餘暇を以て此等の人々の便利を圖り今後此の廣告欄内に交詢案内の一部を備え置き女子職業に就くの都合を計り度希望せり

交詢案内の規則

此案内は吾社員が餘暇を以て致すとゆえ手數料等は一切申受けざるは勿論なり左れば依頼の人々も決して催促がましきとを申越されざるよう豫め願置候事

女教員、うば、こしもと、奉公口、其外さまざまの女の職業に付き雇ひたしと思ふ人及び雇はれたしと思ふ人ともゝ其由を細かに申越さるべし吾社は之を次に記るす如き躰裁にして無名にしてたゞ番號を付し廣告すべき事

雇ひ主及び望み手は此の廣告を見て第何號の口へお世話ありたしなど勝手に申越さるべし左すれば吾社は其間に立ち双方へ申送り相談とゝのひたらば更めて此所に廣告して前の廣告を取消し尚ほ一つの女職の途を開きたるとを[illegible]

前申す如く手數料は一切要せざれども雇ひ主及び望み手の双方へ一應の問ひ合せと其後ち否やを返事するとにより少くとも三四回の郵便を出さずば相成まじ因て双方とも御依頼の初めに郵便切手拾錢を封入して頼み越されたき事。

交詢案内廣告の「ひながた」

●雇ひたき方（甲）

- 第一　敎師　女の方にて年は何才位宅に來りて英學のリードル三位ひを敎へて下さる方はなき乎尤も頼み手は東京三番町住
- 第二　うば　去る一月生れの女の子のうば年は三十程にて正直なる人あらば雇ひたし尤も頼み手は鹿兒島の櫻島にて
- 第三　下婢　田舎出の正直ものにて十五六の小女月給は一圓半位にて雇ひたし尤も頼手は東京富士見町
- 第四　髪結　仙台地方へいろいろの束髪の結び方を敎へに來る女あらば雇ひたし尤も給金は十圓にて二ヶ月程
- 第五　お針　正直な老女にて五十程の人お針に雇ひたし尤も袴も仕立らるゝ人但し雇ひ先は西京住の華族也

●雇れたき方（乙）

- 第一　敎員　ある女學校の卒業生十八才也毎日三時間ほど月給十圓以上にて英語英學の敎授いたしたし尤も東京にて
- 第二　學婢　學問篤志なれども學資なくして困窮する田舎出の十六の娘若し諸書さへ出來れば安く奉公したしと云ふ
- 第三　字拾　是迄で或活版屋の字拾を爲せし十三の小女越後邊へ參りたき願あり新聞屋などにて需めはなきや
- 第四　下婢　年十四才なり正直のつもり越後生れきれうも小間遣ひには成れる夜具衣服一通り持參給料二圓にて願う
- 第五　編輯　英語英學は普通女學の卒業生ほど出來米國へ三年留學したり何か編輯著作上にて依頼されたき方は報焉

●喜みの惠み

- 第一　乙第一は去月甲第一と相談まとまりたり
- 第二　乙第二は甲第三の宅にて信切に引取り介抱す

京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●速記彙報

●無定期（毎年三回以上六回以下）發行
●第一冊發行
●正價一冊四錢四冊十六錢
●郵税一冊二錢四冊八錢

第壹冊目次

●速記彙報發刊主旨●速記彙報題詞　中村敬宇◎論説●日本速記大會議開設の意見　吉木竹次郎●演説場監臨の警吏に望む　K. H.　◎雜記●筆記ニ關スル法令●速記萬國大會議實況●ロンドン府知事が速記大會議會員を其官邸に招待して宴會を開かれたるときの景况●讀講談演説集●速記書の印刷高●講談演説集と政談之眞影

東京木挽町一丁目六番地
發行　速記彙報發行所

教育時論第百貳號目次

明治二十一年二月十五日發兌

社説 ●伊澤修二君音樂學校長となる
教育 ●能勢榮氏ニ答フ（峯是三郎）●德育上ノ諸論説（土屋夏堂）（蜻蛉生）（隱酉生）●父兄ノ歡心ヲ求ムル一手段（阿部東作）●教育事業ハ名譽を死後に留むるに足れり（村尾愷太郎稿）
理科 ●ハーヴェー氏血液循環ノ發見
哲學 美情ノ養成（隱酉生）
文藝 ●人は教へと先天と（ゑ、ひこ）●送別の唱歌●紀元節の歌●學校ノ兒童ニ與フ（白井規矩郎作）●詩
内外雜纂 ●話の種●學校衞生の一端●兒童の推理力●篤志家の事蹟●繼母の小言に似たり●時事新報の德育論●躰操の誤用●教師の能筆●通信教育新聞●地方教育會雜誌批評●新刊雜誌●地方學事通信●天羽教育會●新聞の摘萃
官報數件　**廣告**十餘件

本誌一冊定價金五錢郵税一錢
見本誌ニ限り郵便切手代用不苦

東京下谷區練塀町十四番地
發兌所　開發社

發兌				
一月。七日	十四日	廿一日	廿八日	
二月。四日	十一日	十八日	廿五日	
三月。三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
四月。七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價			
一册。五錢	郵税。一錢	（但府内無郵税）	
十册。四十八錢	郵税。十錢	（同前）	
半年分	一圓十七錢	府外は	一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町毅々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都西條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入タリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石春堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

東京京橋區日吉町八番地
發行所　本局　女學雜誌社

編輯兼發行人　嚴本善治
印刷　森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY